

洛西竹林公園の竹笹

(付. ユフロ第17回世界大会竹専門部会)

岡 村 は た

はじめに

京都には古くから京大の上田弘一郎博士、伊佐義朗先生、麓次郎先生らが中心となり、京大上賀茂試験地および京都府立植物園の一隅に多くの竹笹の種類が収集栽培されていた。

戦後、1950年代に竹笹専門植物園としては世界に類のない富士竹類植物園が、前島麗祈園主のもとに開設され園主自ら全国各地から集めた多くの株をもとに、何度も場所を移し、園主も二代目前島正雄館長、園長室井緯博士のもと、現在は静岡県駿東郡長泉町一色にある。全国からの竹笹集めには20年あまり、筆者も関係しており、また、富士竹類植物園報告が年1回出されている(本年度27号)、研究用実験木もあり、一方では園芸用苗を定期的に分譲している。

その他、名古屋植物園、神奈川県フラワーセンターも多くの観賞用竹笹を栽培している。

一方、1970年代になって、上田弘一郎博士を中心として、国際都市京都にふさわしい壮大な竹林公園の構想がねられ、前々から珍しい種類の依頼をうけていたが、1978年になって急に促進された。それは1976年、国際木材連合オスロ大会で、会長になったリーゼ博士(西ドイツのハンブルグ大学、竹の組織学の世界的権威)が、1977年日本の木材学会に招かれた折、ユフロ(国際木材連合)の第17回会議が日本で1981年に催されるに当たり、日本でやるからには、竹のシンポジウムを持っては如何という話になったのである。それについて世界の竹類学者の名簿作りや、竹のシンポジウム・プログラムをきめ、講演者に依頼するなどが行われ、その見学地には木材連合全体の見学会に加えて竹の専門の人々だけで研修ツアーが計画され、多くの見学地の1つに竹林公園の見学も入れられた。そこで、1981年9月までには一応新しい葉が出揃った状態になっていなければならないので、植込みが急がれたのである。珍種のうちには名城大学田中幸男先生、神戸市北須磨小学校長藤岡昇先生が氷の山や比良山から集められたノチザエキシマネマガリ、シモフリネマガリ、宝塚付近から発見されたアケボノヤダケ、山

田義孝氏が滋賀県で発見されたキシマネザサ、キスジミヤコ(ザサ)などが入れられた。

1981年6月17日開園され、その後、夏から秋にかけて3回、本年2回調査した結果、植込まれた当時、小さくて名が不明であったもの(ラベルとちがう株が植込まれた可能性があるものもあった)などを含め、その後かなりの種類も植込まれ、見本園辺りの栽植図は大改革を必要とした。次に1982年10月現在についてのべる。

位置と面積、交通

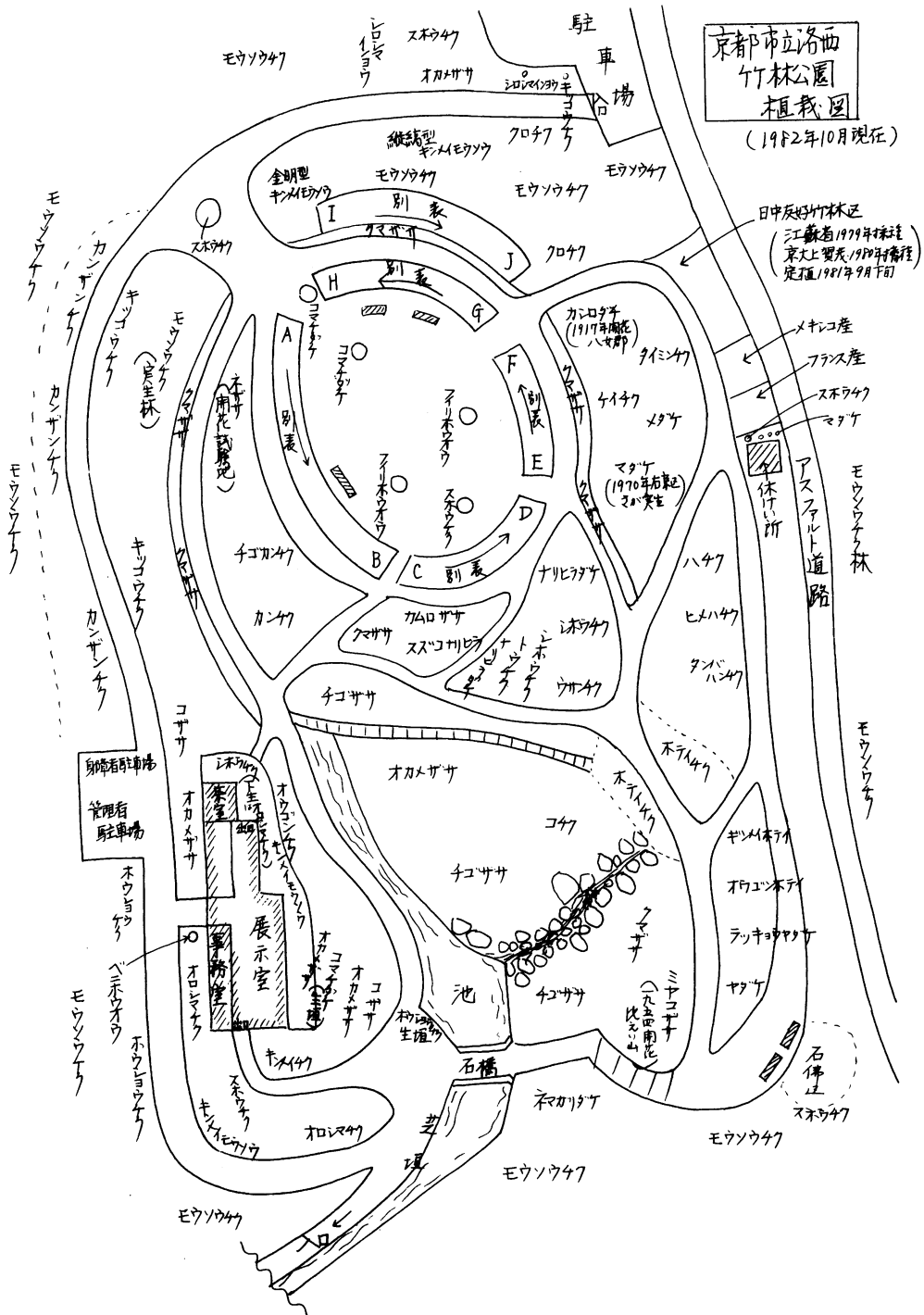
京都市西京区大枝北福西町2丁目300-31にあり、面積35,068㎡で、生態園5,000㎡、タケ、ササ約100種がある。交通は阪急桂駅西口から西3系統乗車「南福西町」下車、東へ約200mの所にある。阪急「ひがしむこう」で下車、タクシーが便利。

栽植図および見本園栽植位置

栽植図のA~B, C~D, E~F, G~H, I~Jは、次のような種類が植込まれている。



写真1 1980年9月 訪中団が南京林産工業学院を訪れ、中日友好竹林のもとになった苗を定植した記念撮影である(京大、上田晋之助氏撮影)。(後左 熊文愈教授、後右 周芳純付教授、中央 笠原基知治教授、右 田中幸男講師である)



図において左下の方にも入口があり、その辺りが最も低い。
 右側と展示室の辺りおよび見本園の辺りは高地になっている。

台地上の見本園わく内

E	171	シモアリチシマ(絶)
	28	シロシマインヨウ
	○	モウソウチク寒庄 (1970)
	133	オオバヤダケ
F	43	リクチュウダケ
	95	リユウキユウチク
G	150	フシダカシノ
	○	ヤダケ
	○	メダケ再生竹(絶)
	92	ハガワリメダケ
	欠	ギンメイチク(絶)
	14	欠
	○	トクガワザサ×マダケ
	マダケ	
	メダケ	
	2	メダケ×マダケ
	1	メダケ×マダケ
	44	ビロウドナリヒラ
	欠	
H	26	インヨウチク
J		クロチク
		アオナリヒラ
		オウゴンホテイ
		トサトラフダケ
		ギンメイチク
		ゴマダケ
		ヒメシマダケ
		メグロチク
		アオメダケ
I		シボチク

A	114	ラセツチク
	111	キンメイアズマザサ
	欠	
	142	ウンゼンザサ
	102	シロアケボノネザサ
	143	エソシヤコ
	103	シロシマネザサ↓ネザサ
	欠	
	101	キスシネザサ
	96	ハコネダケ
	97	ハコネダケ↓ハコネメダケ
	123	ヤリクマザサ
	98	ヒメシマダケ
	151	シロシマシヤ
	欠	
	131	アケボノヤダケ
	132	アケボノスジヤダケ
	154	ハコネシノ
	128	チュウゴクザサ
	153	シイヤザサ
	124	キスジクマザサ
	100	アイリケネザサ↓キンメイアズマザサ
	136	ミイロチシマ(絶)
	141	キンタイザサ↓キンメイアズマザサ
	107	ゴキダケ
	欠	
	139	キシマコンゴウ
	152	キンマシイヤ
	104	アケボノザサ↓アケボノオロシマ
	134	ヤクシマダケ(絶)
B	109	コチク
D	121	キスシシヤコ↓キスシネザサ
	108	ケザヤノゴキダケ
	137	ノチザエキシマネマガリ(絶)
	27	シロシマインヨウ(無)
	87	ダイフクチク
	19	アイリホテイ
	138	シヤコタンチク
	140	チマキザサ
C	144	スズダケ

生態園植栽目録

和名・漢字	漢名	ローマつづり	学名	備考	ラベル番号
モウソウチク	孟宗竹	Mōsōchiku	<i>Phyllostachys heterocycla f. pubescens</i> Muroi	種名は松村の名集による	(1)
キンメイモウソウ	金明孟宗	Kimmeimōsō	<i>Ph. heterocycla f. bicolor</i> Muroi et Kasahara	表に栽植	(2)
タテシマモウソウ	縦縞孟宗	Tateshimamōsō	<i>Ph. heterocycla f. Nabeshima</i> Muroi	裏に栽植	(2)
キッコウチク	亀甲竹	Kikkōchiku	<i>Ph. heterocycla Matsumura</i>	有陵型	(3)
マダケ	真竹	Madake	<i>Ph. bambusoides</i> Sieb. et Zucc.		(4)
キンメイチク	金明竹	Kimmeichiku	<i>Ph. bambusoides f. Castillonis</i> Muroi	緑心黄皮型周縁キメラ	(6)
ギンメイチク	銀明竹	Gimmeichiku	<i>Ph. bambusoides f. Castillonii-inversa</i> Muroi	黄心緑皮型周縁キメラ	(14) 枯
オウゴンチク	黄金竹	Ōgonchiku	<i>Ph. bambusoides f. holochrysa</i> Muroi		(8)
カシロダケ	皮白竹	Kashirodake	<i>Ph. bambusoides f. Kashirodake</i> Makino		(5)
シンボチク	敏竹	Shinbōchiku	<i>Ph. bambusoides f. marliacea</i> Makino	これは片皺型である	(9)
ケイチク	桂竹	Keichiku	<i>Ph. Makinoi</i> Hayata	一名タイフンマダケ(台湾真竹)	(10)
ヒメハチク	姫淡竹	Himehachiku	<i>Ph. humilis</i> Muroi	最近中国に似たものがあるという	(15)
ハチク	淡竹	Hachiku	<i>Ph. nigra f. Henonis</i> Muroi	系統発生上はクロチクの母種	(11)
タンバハンチク	丹波斑竹	Tambahanchiku	<i>Ph. nigra f. Boryana</i> Muroi	生理斑といわれる	(12)
トサトラフダケ	土佐虎斑竹	Tosatorafudake	<i>Ph. nigra var. tosaensis</i> Makino	須崎から久礼にいたる山に分布	(13)
クロチク	黒竹	Kurochiku	<i>Ph. nigra</i> Munro	久礼, 京都に多い	(16)
メグロチク	目黒竹, 芽黒竹	Megurochiku	<i>Ph. nigra f. Megurochiku</i> Nakai	黒心緑皮型周縁キメラ	(17)
ゴマダケ	胡麻竹	Gomadake	<i>Ph. nigra f. panicat</i> Nakai	クロチクとハチクとの中間雑種	(25)
ホテイチク	布袋竹	Hoteichiku	<i>Ph. aurea f. panicat</i> Carr.	胡擔竹, 鼓山竹の漢字名がある。種々な程度の周縁キメラ型がある	(18)
フイロホテイ	斑入布袋	Fuirihotei	<i>Ph. aurea f. albo-variegata</i> Makino	20年前までは関東に多かったが今は関西にもある	(19)
オウゴンホテイ	黄金布袋	Ōgonhotei	<i>Ph. aurea f. holochrysa</i> Muroi et Kasahara	3層ともに易変性黄色遺伝子をもつ	(23)
オウゴンホテイ	黄金布袋	Ōgonhotei	<i>Ph. aurea f. holochrysa</i> Muroi et Kasahara	上記よりも稈は初期には緑色を帯びる	(32)
キンメイホテイ	銀明布袋	Gimmeihotei	<i>Ph. aurea f. flavescens-inversa</i> Muroi	黄心緑皮型周縁キメラ	(21)
ウサンチク	烏山竹	Usanchiku	<i>Ph. aurea f. Takemurae</i> Muroi	ホテイチクの縮節のないもの, 鹿児島県に分布する	(22)
(漢名) 毛竹 (南京林産工業学院より)			<i>Ph. pubescens</i> Mazel	一般にモウソウチクといわれるが多くの系統がある, 日中友好竹林	(29)
(漢名) 白哺竹 (中国)			<i>Ph. dulcis</i> Mc Clure		(30)
(漢名) 白夾竹 (中国)			<i>Ph. Bissetii</i> Mc Clure		(31)

和名・漢字名	ローマつづり	学名	備考	ラベル番号
インヨウチク	In-yō-chiku	Hibanobambusa tranquillans Maruyama et H. Okamura		(26)
シロシマインヨウ	Shiroshimainyō	H. tranquillans f. shiroshima Muroi et H. Okamura		(27)(28)
ナリヒラダケ	Narihira-dake	Semiarundinaria fastuosa Makino		(40)
アオナナリヒラ	Aonari-hira	Se. f. viridis Murata	最近 var. から降格された	(41)
ヤシヤダケ	Yashadake	Se. Yashadake Makino		(42)
ビロードナリヒラ	Birōdonari-hira	Se. villosa Muroi		(44)
リクチュウダケ	Rikuchū-dake	Se. Kagamiana Makino		(43)
トウチク	Tōchiku	Sinobambusa Tootsik Makino	竹の皮はナリヒラよりうすく、節に長毛がある	(50)
スズコナリヒラ	Suzukonari-hira	Si. Tootsik c.v. "Suzukonari-hira"	錦葉集の“鉢小葉平”はナリヒラダケの白葉品である	(51)
カンチク	Kanchiku	Chimonobambusa marmorea Makino		(60)
チゴカンチク	Chigokanchiku	Ch. marmorea f. variegata Ohwi	カンチクの holochrysa 型である	(61)
シホウチク	Shihōchiku	Tetragonocalmus quadrangularis Nakai	方竹ともいう	(62)
オカメザサ	Okamezasa	Shibataea Kumasaca Makino	鹿見島ではクマササという、豊後笹、五枚笹、神楽笹ともいう	(70)
ホウライチク	Hōraichiku	Bambusa glaucescens Munro	B. multiplex より先についた名を採用	(80)
ホウオウチク	Hōōchiku	B. glaucescens f. elegans Muroi	ホウライチクに戻りやすい	(82)
フイロウオウ	Fuirihōō	B. glaucescens f. albovariegata Muroi		(81)
ベニホウオウ	Benihōō	B. glaucescens f. viridistriata Muroi		(84)
ホウショウチク	Hōshōchiku	B. glaucescens f. variegata Muroi		(85)
スホウチク	Subōchiku	B. glaucescens f. Alphonso-Karii Hatushima	ホウライチクの holochrysa 型	(86)
コマチダケ	Komachidake	B. glaucescens f. solida Muroi et I. Maruyama	ホウライチクに戻りにくい	(83)
ダイフクチク	Daifukuchiku	B. ventricosa Mc Clure	昔からブットチク（仏付竹）とよばれて いるもの	(87)
カンザンチク	Kanzanchiku	Pleioblastus Hindsii Nakai		(93)

ラセツチク	和名・漢字名	ローマつづり	学名	備考	ラベル番号
	螺節竹	Rasetsuchiku	<i>Pleioblastus Hindsii</i> f. <i>monstr. spiralis</i> Nakai	カンザンチクよりもむしろタイミンチクに似た野地でアオバダケとよばれているものうち、奇形の出やすい系統で、母の半数は奇形(亀甲、十字対生、ラセン)で、知覧付近には野生が散生する。栽培しない間に奇形で野生で育っている。	(114)
タイミンチク	大明竹	Taiminchiku	<i>Pl. gramineus</i> Nakai		(94)
リュウキウチク	琉球竹	Ryukyuchiku	<i>Pl. linearis</i> Nakai		(95)
メダケ	女竹	Medake	<i>Pl. Simonii</i> Nakai		(90)
ハガワリメダケ	葉菱女竹	Hagawarimedake	<i>Pl. Simonii</i> f. <i>heterophyllus</i> Muroi	母種は野生のメダケ	(92)
フシダカシノ	節高篠	Fusidakashino	<i>Pl. kiustianus</i> Makino		(150)
ハコネダケ	箱根竹	Hakonedake	<i>Pl. Chino</i> f. <i>vaginatus</i> Muroi		(96)
ヒメシマダケ	姫縞竹	Himeshimadake	<i>Pl. Chino</i> c.v. "Himeshimadake"		(98)
キンメイアズマネザサ	金明東根笹	Kimmeiazumanezasa	<i>Pl. Chino</i> c.v. "Kimmei"	アズマネザサのキンメイ型である。アズマザサにもキンメイ型があるので和名はこのようにいわないともちがえる	(111)
コチク	小竹	Kochiku	<i>Pl. Chino</i> f. <i>humilis</i> S. Suzuki		(109)
アケボノザサ	晝笹	Akebonozasa	<i>Pl. argenteo-striatus</i> f. <i>Akebono</i> Muroi	本園のものはオロンシマ型をしている	(104)
ゴキダケ	護器竹	Gokidake	<i>Pl. argenteo-striatus</i> f. <i>pumilus</i> Muroi		(107)
ケザヤノキダケ	毛鞘護器竹	Kezayanogokidake	<i>Pl. xestophyllus</i> Koidz.		(108)
チゴザサ	稚児笹	Chigozasa	<i>Pl. Fortunei</i> Nakai		(110)
アイリケネザサ	斑入毛根笹	Fuirikenezasa	<i>Pl. Fortunei</i> c.v. <i>Fortunei</i>	f. <i>aeobstriatus</i> Muroi と同一品	(100)
オロシマチク	於呂島竹	Oroshimachiku	<i>Pl. distichus</i> Muroi et H. Okamura		(106)
ネザサ	根笹	Nezasa	<i>Pl. distichus</i> var. <i>glaber</i> Sugimoto	(99)(103)1982.10現在	(101)
キスジネザサ	黄筋根笹	Kisuzinezasa	<i>Pl. distichus</i> var. <i>glaber</i> c.v. "Kisuzinezasa"		(107)
シロアケボロネザサ	白晝根笹	Shiroakebonozasa	<i>Pl. distichus</i> var. <i>glaber</i> c.v. "Shiroakebono"		(121)
シロシマネザサ	白縞根笹	Shiroshimanezasa	<i>Pl. distichus</i> var. <i>glaber</i> c.v. "Shiroshima"	(103はネザサ 1982年10月現在)	(139)
キスジコンゴウ	黄筋金剛笹	Kisuzikongō	<i>Pl. kongosonensis</i> f. <i>aureo-striatus</i> Muroi et Y. Tanaka		(105)
カムロザサ	禿笹	Kamurozasa	<i>Pl. viridistriatus</i> Nakai		(153)
シイヤザサ	椎谷笹	Shiiazasa	<i>Sasaella glabra</i> Nakai et Koidz.		(151)
ファイリシイヤザサ	斑入椎谷笹	Fuirishiyazasa	<i>Sasae. glabra</i> f. <i>albostriatus</i> Muroi	シロシマシイヤともいう	(152)
キンシマシイヤ	黄縞椎笹	Kishimashiya	<i>Sasae. glabra</i> f. <i>aureostriata</i> Muroi		

和名・漢字名	ローマつづり	学名	名	備考	ラベル番号
ハコネメダケ	箱根女竹	Hakonemedake	Sasae. Sawadai Makino	ハコネシノともいう1982年10月現在	(97)(154)
キンメイアズマザサ	金明東笹	Kimmeiazumazasa	Sasae. ramosa f. albo-striata Muroi	キンメイアズマネザサがあるのでフ ルネームでよぶ	(14)(100)
メキシカンウイーピングバンブー		Mexican-weeping-bamboo	Yushania aztecorum Mc Clure		(112)
ヤダケ	矢竹	Yadake	Pseudosasa japonica Makino		(126)
ラッキョウヤダケ	薤矢竹	Rakkyoyadake	Ps. japonica var. Tsutsumiana Yanagita		(130)
アケボノスジャダケ	曉筋矢竹	Akebonosujyadake	Ps. japonica f. akebonosuji Muroi	藤岡昇氏が野生で発見された株	(132)
ヤクシマダケ	屋久島矢竹	Yakushimayadake	Ps. Owatorii Makino	枯死	(134)
オオバヤダケ	大葉矢竹	Ōba-yadake	Ps. Hamada Hatsusima	鹿児島県野生	(133)
ミヤコザサ	都笹	Miyakozasa	Sasa nipponica Makino		(120)
ウンゼンザサ	雲仙笹	Unzenzasa	S. gracillima Nakai		(142)
エゾミヤコ	蝦夷都	Ezomiyako	S. apotensis Nakai		(143)
キンタイオオバザサ	金帯大葉笹	Kintaiōbazasa	S. macrophylla f. nobilis Muroi	内田繁太郎氏が野生群落を発見された株	
クマザサ	隅笹	Kumazasa	S. Veitchii Rehd.		(124)
キスジクマザサ	黄筋隅笹	Kisujikumazasa	S. V. cv. "aureo-striata"		(128)
チュウゴクザサ	中国笹	Chugokuzasa	S. V. var. hiruta S. Suzuki		(140)
チマキザサ	粽笹	Chimakizasa	S. Chimakizasa Koidz. (S. palmata Nakai)		(138)
シャコタンチク	積丹竹	Shakotanchiku	S. Cernua f. nebulosa Tatewaki		(123)
ヤリクマザサ	槍熊笹	Yarikumazasa	S. hastatophylla Muroi		(125)
コクマザサ	小熊笹	Kokumazasa	S. albo-marginata Makino		(135)
チシマザサ	千島笹	Chishimazasa	S. kurilensis makino et Shibata	根曲竹(ネマガリダケ)ともいう	(127)
シモフリチシマ	霜降千島	Shimofurichishima	S. kurilevsis c.v. "Shimofuri"	岡村らが野生状態を発見したもの、 枯死(氷の山)	
ノチザエキシマ	後牙黄縷根曲	Nochizaekishima	S. kurilevsis c.v. nochizaekishima	岡村らが野生状態を発見したもの(氷の山)	(137)
ミイロチシマ	三色千島	Miurochishima	S. kurilensis c.v. miurochishima	岡村らが野生状態を発見したもの(比良山)	(127)
スズダケ	煤竹	Suzudake	Sasamorpha borealis Makino et Shihata		(144)

日中友好竹林の由来

この竹林について述べる前に先ず記録しておくべきことがある。それは1979年7月、筆者はモウソウチクの開花報告文を書くため、モウソウチクの開花枝の枝葉、苞と栄養枝の枝葉との形態的相同部分の研究のため、1年目のモウソウチクの枝をいただくために上賀茂試験地に行った時、渡辺政俊技官から南京林産工業学院の「竹林培育(1974)」のコピーをいただいた。この中にはモウソウチクの開花結実、播種のことが書かれていた。中国はモウソウチクの原産地であり、「原産地では開花周期に関する種々なる変異の幅が予想され多くの系統があるので、開花結実は常にどこかで見られる」ことと筆者らは予想していたが、この書物のコピーには開花は処々でみられ、結実も多く、これを採種して、消毒、麻袋などに入れ吊して保存し、次の春に播種するとのことが書かれてあった。

これより遡ること1年、横浜でモウソウチクが開花結実した。そして、いくらかの種実が得られた。この横浜のモウソウチク(開花の経緯については本誌Vol.8 No.1)は、1911年に開花結実したものを牧野富太郎の指導で、翌年播種したもので、株分した先のすべてを含めて1978年7月一斉開花結実した。すなわち、それらは67才の夏に開花したものであった。

筆者は笠原基知治(法政大)、田中幸男(名城大)氏らと20年来、竹笹の開花について全国をまわって研究していたが、このモウソウチクの開花でも当然その株分さきのすべてに足を入れて研究した。そしてその報告文を書くに当たり原産地中国の開花現象に興味をもっていた時であった。筆者はこの書物の発行者である南京林産工業学院竹類研究室あて早速モウソウチクについての17項目の質問を中国文で出すことにした。その際、上田弘一郎博士、笠原基知治博士とも御相談して、今回の横浜、上賀茂のモウソウチクの種実を送ることも書いた内容の手紙を1979年10月中旬に出した。

その返事は1980年2月19日当時兵庫高校に勤務中の岡村あてに来た。差出人は周芳純付教授である(中国滞在30年あちらで薬剤師をしていた県一時代の友人垂谷好子女史に手紙の和訳、中国訳を依頼した)。この手紙におけること数日で、中国産毛竹の種実が岡村あて寄贈された。その種実は、額をかぶったものとかぶらないものと別々の包みにされ、さらに1つの布製の袋に入れてあり、検疫済みになっていた。手紙は入っていなかった。この種実について、その後、問い合せたところ、採取方法については他人の依頼によりとった種実の残りなので1株から採ったか、多数の株から採ったかはわからない。産地は広西桂林地区荔浦県、保存法は1979年9月中旬、採取後日に晒して干し、麻袋の中に貯えたものであると

いう。

早速、この種実の保存、または播種について次のところに依頼した。(1)春日井市名城大農場(田中幸男氏)、(2)横浜市港北区師岡町(笠原基知治氏)、(3)京都市右京区(上田弘一郎氏)、(4)御殿場市富士竹類植物園(室井緯氏)、(5)京大上賀茂試験地(渡辺政俊氏)、(6)茨城県農林水産庁林業試験場(内村悦三氏)、(7)宇都宮市宝木町(若山幸央氏)、(8)鹿児島県始良郡農業試験場(浜田甫氏)、(9)兵庫県明石市(近藤昭一郎氏)、そのほか、笠原博士にあずかっていたいただいたものは横浜市緑政局こども植物園、東京農業大学農場、神奈川県林業試験場、栃木県林業センター、京都府立農業研究所山城分場にそれぞれ依頼されたということである。

このうち、(5)の渡辺氏が栽培されていたものを、洛西ニュータウン竹林公園の一角に「日中友好竹林」として1981年9月ユフロ大会時に来日された熊文愈教授(南京林産工業学院竹類研究室)と、上田弘一郎博士との手によって定植されたのであった。(写真2)。なお定植され丸1年後の1982年10月22日(写真3)、4株が元気に育っているが、右手前の1株は立性だが、他の3株は横性で葉も大きく、肩毛の発達も非常によい。

次にこれに対になる「日中友好竹林」について述べる。さきに筆者が林産工業学院に贈った種実とは1979年7月



写真2 1981年9月 ユフロ第17回大会時、竹のグループが、洛西竹林公園を訪れた際の記念撮影である

(左 熊文愈教授、中央 富士竹類植物園 柏木次治氏、右 笠原基知治博士)



写真3 1982年10月、定植後丸1年の日中友好竹林、
写真2の株は、この写真の左側のものである。

横浜、上賀茂で結実したもの合計10gである。横浜のものは横浜市緑区斉藤巧氏の愛培されていた竹林（前田氏が前回の開花時に採取し、牧野富太郎氏の指導により定植したものの一部で）、および上賀茂試験地に上記から分株されて、渡辺氏が管理栽植されていた株からとった種実であり、日本側としてはまことに少量ながら貴重なものであった。中国側もこれを大切に播種して中日友好竹林を作るという手紙をもらっていた。

それは1980年10月に実現された。すなわち1980年4月、筆者が送った種実をあらかじめ播種し、苗にしていたもので、1980年10月に竹産関係の一部学者が加わった竹の友好団体が中国を訪問した際、同学院の中の実験地に訪中団の笠原博士らの手によって定植された。写真は当時のもので上田晋之助氏によったものである(写真1)。

この系統は67才のモウソウチクが作った種実であり、67年開花周期遺伝子をホモ、またはヘテロにもっていることの明らかなもので、1個体ごとに別の藪をつくる必要があることを、笠原博士によって同学院側に伝えられた。この種実から生じた藪が次回何年に咲くかは非常に興味があり、日本でも同時に並行して実験が試みられているところである。

以下に周芳純付教授から筆者あてに1981年3月に届けられた私信を紹介して、経緯をのべる。

岡村博士先生

貴女の御協力の下に、昨年私は貴国の Matsui 博士先生の招待状を受け取りました。招待状は私に今年9月に京都に於て開かれる Iufro 第17回国際会議に出席するものです。このことについて、私は貴女の御好

意に非常に感謝しています。私は貴国の会議に参加する事が出来て、学習できるのは大変嬉しいことです。しかし、困ったことには、我国がこの度、会議に出席する人数には限りがあり、そのため、私はこのたび機会がなくて貴国に行き学習することが出来ません。

昨年11月中旬、貴女が御送付下さいました種子で育った竹苗は、“中日友好竹林”をつくりました。非常によく生長しています。管理の仕事を強加する為に、私たちはすでに周囲に垣根を編んで保護し、人をつかわして、管理し、記録しています。3月12日、Iufro 出席された W. Liese 教授が訪問されました時、中日友好竹林を参観されました。貴女が中日両国竹類研究の交流のためにお使いになられた努力は誠に意義のあることです。今後、貴女が中国に来られて、中日友好竹林を御覧になる事を歓迎いたします。

私は貴女が“南京林産工業学院竹類研究室簡録”と私の掘作“我国黄河流域の竹林”の2編の日本語、並びに富士竹類植物園報告26号上に発刊されたことを非常に感謝します。貴女が竹研究会雑誌19号上の撰出され書かれた文章のコピーを私は受け取りました。貴女は近年以来の中日両国竹類研究学術交流の状況を誠実に報導されました。貴女の文章中に私への尊敬がみられたことを感謝いたします。

Pseudosasa amabilis の種子は、現在、私たちは採取しておりません。今後、私達は注意して採集出来たときには、貴方達に御送付申し上げます。

貴女が垂谷好子女史に“中国主要樹種造林技術” p.852—900の日訳を托された事に対し、私達は貴女が私達の仕事に対するの重視を大変感謝いたします。垂谷女史は前に我国山東済南第一病院に勤務していたそうですが、彼女はまた我国に親しい友達があるのではないのでしょうか。もし、私達に頼みたいことがあるならば、私達は必ず力をつくしてあげます。南京と済南は距離があまり遠くはありません。どうぞ我に代って垂谷好子女史に御挨拶をお願い致します。

今後、竹類研究学術交流の強化を希望し、貴女の御身体の御健康をお祈りいたします。

敬礼

南京林産工業学院
竹類研究室

周芳純

1981. 3. 24

付、ユフロ国際林学研究機関連合

第17回世界大会竹専門部会

1981年9月7日から12日まで、69か国、1,500人が京都国際会館に集り開かれた。西ドイツハンブルク大学教授リーゼ博士を会長とするこの会が日本で開かれるに当り、はじめて、竹専門部会（竹および関連種の生産と利用）が発足し、部会長に京大樋口隆昌博士がなられた。筆者も京大渡辺政俊氏の依頼をうけ、世界の竹研究者のリスト作りについて、中国の研究者のリスト作りに協力し、中国文で依頼状を出したところ、40数名の氏名と所属と研究内容の簡単な表が10日間で届けられた。

竹シンポジウムは9月7～8日、12編の論文が発表され、上田弘一郎博士は、日本の竹産業の現状と将来について述べ、国際竹類研究所を設立すべしと提案された。副部会長の林試長オマール・アル博士はバングラディッシュの産業としての竹材を利用面からみて、基礎的研究の重要性を説かれ、これには国際協力が望まれると強調された。自由論文ではインド、中国本土、台湾の竹産業の現状と将来の問題点の指摘、竹類の世界的分布と繁殖体系、タイ国の竹林開発と生産性、竹材の機械、物理的性質、竹パルプの特性および日本の今日の竹産業の展望などが論じられた。

これに並行して、ポスター発表が行われたが、20編でその内容は竹の育種、開花現象、竹林の生産力、竹の組織、栽培方法、竹の化学的性質、加工技術、建築用材への利用、ササの利用、竹栽培の歴史、研究上の問題点など広範囲のものであった。

9月9日には竹専門部会だけによる貸切バス視察で、竹林公園の生態園の見学、お茶席、映画バンブーの鑑賞をした。また、近くのモウソウチク林で、栽培技術の討論と枝打ちを見学、中国の熊文愈教授は富士竹類植物園主任柏木治次氏と、竹稈の年齢について話されていた。さらに、9月11日には京都平安会館で、日本の竹を守る会主催の懇親パーティーが催され、約50名が参加した。筆者は笠原博士とともに熊文愈教授（ポスターで生長点の写真と研究結果発表）と竹の稈の生長点と地下茎のそれとについて、いろいろ話しあった。葉では茎よりも起原層の数が少ないことがあることは広く植物界で知られているが、竹の地下茎についても地上部の稈の生長点の起原層の数よりも多いということらしい。

大会の総話は5項目にまとめられ、また、次の研究集会は2年以内に東南アジアの1国で開催しようとのことであった。（岡村はた）



写真4 写真3の拡大（再出）